

母親という役割からみる話しことばの実態 —現代沖縄社会における自然談話データの分析から—

高橋 美奈子

1. はじめに

園児が2～3人集まると、大抵ごっこ遊びが始まる。そこでは、お母さん役の園児が必ずいて⁽¹⁾、「わたしがやるわ」とか「あら、大変だわ」などと、いわゆる女性語と呼ばれる役割語を用いてお母さん役を演じている。我が子の保育園への送迎の際にこうした情景を目にすると、本土とは異なる固有の方言を持つと言われる沖縄県で生活する園児ですら、4～5歳になると既に標準語による女性の役割語を習得していることに気づかされる。

実際に、著者指導のもとで城間（2013）が行った、沖縄県内の3歳児から5歳児の園児（女兒のみ）を対象にした保育園への入り込み調査では、園児の発話に「フライパンがないわよ」（3歳8カ月女兒）や「夕焼け小焼けなのよ」（3歳9カ月女兒）、「あたしは野菜作っとく」（5歳1カ月女兒）といった標準語による女性語文末詞「わよ」や「のよ」、女性語自称詞「あたし」⁽²⁾の使用が報告されている。また、女性語が使用された場面は、「ごっこ遊びの場面」が全体の9割を占めており⁽³⁾、「ごっこ遊び」では赤ちゃんの世話をしたり、ごはんの支度をしたりする行為者によって、女性語が使用されている。つまり、家庭内場面における女性語は、母親を想起させる役割語として機能していることが分かる。

こうした母親役割のイメージ形成の一端は、子ども向けのテレビアニメ番組に拠るところが大きいだろう。子ども向けテレビ番組において母親がどのように描かれているのかを調査した堤（石渡）（2011：65）は、「女の子に向けてのみ描かれる母親の姿は、共同幻想と言われるような理想的な母親だけである」と、現実には幻想に過ぎない良妻賢母型の母親イメージだけが描かれているという。さらに、佐竹（2003）では、テレビアニメ番組で描かれている大人の言葉づかいは、「個人の性格ではなく家庭での役割、世代、階層な

どによってパタン化されて描かれているものが多い」(p. 52)と述べ、特に、夫婦のことばづかいは性差が大きく、「家庭での性別役割分業がことばづかいの性差によって示されている」(p. 53)と指摘している。中村(2002)では、「女(男)はこういう話し方をするものだ」と歴史的に語り続けられて形成されるイメージ・カテゴリー規範をジェンダー・イデオロギーと名付けている。こうしたジェンダー・イデオロギーは、メディアを通して、今もなお、再生産されているのである。

しかしながら、現実社会での女性のことばづかいは、必ずしもジェンダー・イデオロギーに従ったものではないことが多くの先行研究で報告されている。例えば、高崎(1997、2002)は働く女性のことばを調査し、職場や職種によって、女性が使う表現の幅が異なっているという多様性のある言語使用の実態を示している。岡本(2010)では、女子学生と中年女性の話しことばを調査し、いずれの女性たちも親しい女性同士の二者間会話であれば、女性語より中立語の使用率が高く、さらに、女性たちが個々の場面でふさわしいローカルな基準に基づいて、多様なことばで自分を表現していることを明らかにしている。ただし、女性たちが親しい間で強い男性語を使うときには、笑いを伴わせたり、自分のことばではないことを示す囲み表現を用いたりしており、必ずしもジェンダー・イデオロギーから自由ではないことも指摘している。

一方で、岡本(2010)は、地方によっては、「おれ」や「じゃねえ」といったいわゆる標準語による男性語であっても、男女問わず使用可能なローカルな規範意識が存在することも紹介している。しかし、こうしたローカルな規範は、少しでも使用場面や使用相手が広がると、標準語の規範によって容易に覆される。熊谷(2010)によると、東北では、男女ともに自称詞は「おれ」が一般的な使用であるが、時代とともに標準語によるジェンダー・イデオロギーが浸透し、若い女性は「おれ」を使うことに抵抗感を持つようになったという。自称詞「おれ」のように、標準語と同じ語形を持つ場合、地域語としては無標であった語や表現が、標準語規範のものさしで測られると、突如、「女らしくない」と有標性を帯びてしまう。

では、方言主流社会における標準語による規範意識の再生産を打ち破るた

めにはどうすればよいのか。まず、各地におけるローカルな規範に基づいたことばづかいを一つ一つ可視化し、蓄積する必要があると考える。特に、標準語では男性語とされる語と同じ語形でありながら、地域語としては男女差がない語形を明らかにすること⁽⁴⁾が、中村(2002:31)が言うところの「ジェンダー・イデオロギーを変革することばづかい」となり、ジェンダー規範を変えていくことにつながるのではないだろうか。

本稿では、女性の役割として、幼児期から規範意識が最も強固である母親という役割に着目し、実際の母親の発話から抽出した標準語による男性語と同じ語形や表現について、母親の発話意図を考察する。さらに、その結果を踏まえ、沖縄社会におけるローカルなジェンダー規範意識を明らかにする。

2. 調査概要

調査データは、沖縄県中南部出身の家庭にご協力いただき、家庭内で録音した自然談話を用いる。調査対象家族は二家族である。A家は父親(40代)、母親(40代)、長男(中学生)、次男(小学4年生)の4人家族、B家は父親(40代)、母親(40代)、長女(高校生)、次女(中学生)、三女(小学3年生)、四女(小学2年生)の6人家族である。談話の収集は、2012年11月に、各家族の保護者にICレコーダーを約1週間お渡しし、家族の日常会話を録音していただいた⁽⁵⁾。談話が自然談話であることを最優先したため、調査者は録音場面に介入せず、録音する場面の選択や録音時間を全て各家族の保護者に委ねた。結果として、録音されたデータは、A家は2時間35分52秒(全4場面)、B家は2時間5分5秒(全4場面)である。これらの録音データは、全て文字化をし、分析データとした。

本調査では、上述した二家族の母親が家庭内談話において実際に用いている発話の中で、標準語のジェンダー・イデオロギーによる規範とは異なる発話を抽出し、その発話意図について明らかにすることを目的とする。ジェンダー・イデオロギーによる女性語・男性語とは、先行研究(益岡・田窪1992、鈴木1993、金水2003、佐竹2003、小林2009)で男女差が顕著であるとされる語形や文法、発話行為をさす。

3. 調査結果

3.1 対称詞「おまえ」

A家とB家の母親の発話を分析したところ、標準語では男性語とされる語形や文法、発話行為は、対称詞「おまえ」と行為要求表現「命令形」と「禁止形」、疑問の文末詞「だろ？」が主なものとして挙げられる。

まず、母親による対称詞「おまえ」がどのような文脈で使われているのかを考察する。談話例1は、B家の母親と三女の対話で、母親が三女の一日の行動を質問するものの、なかなか三女が詳細を話そうとしない場面での談話である。対称詞「おまえ」（発話文3）は三女を指しており、「喋れ」という命令形とともに使われている。談話例2のA家の母による「おまえ」（発話文3）も、次男を指す対称詞であり、「行け」という命令形とともに使用されている。

談話例1 B家の母による対称詞「おまえ」

1	母	もっと喋れ。
2	三女	クー<笑い>。
3	母	<u>おまえ</u> が喋れ。
4	三女	やだ。
5	三女	なんかー、行ったらー、ピザー {うん [母] } *、あれ、なんか、きなこっばい？ * {うん [母] }、もちっばいとか…。

* { } は発話途中の聞き手のあいづちを示し、[] はあいづちを行った話者を示す。

* 「？」は発話文が質問あるいは確認要求をあらわす疑問文であることを示す。

談話例2 A家の母による対称詞「おまえ」

1	母	だから、鍵持って、鍵自分で締めないから、鍵持ってって言うてるだろー、フン [ウチナーヤマトグチのフィラー]。
2	母	お母さん、忘れ物しても持っていけないって何回言ったら分かるの？。
3	母	<沈黙2秒> <u>おまえ</u> も、鍵持って忘れ物したらダッシュして帰ってから取ってから行け=*。
4	母	=学校行け。
5	次男	おれ、忘れ物しない。

* 「=」(ラッチング) は改行される発話と発話の間に間が(ほとんど)ないことを示す。

次の談話例3は、A家の母親と長男、次男の3人の談話である。3人が、次男の学校で使う裁縫道具の注文用紙を見ながら、どの色のケースがよいか話している場面で、長男が赤い色のケースが良いと言った後に続く談話である。

談話例3 A家の母による対称詞「おまえ」

1	次男	<沈黙4秒>普通、これ「赤い色ではない色のケースを指している」とか買うでしょ？。
2	母	<u>おまえ</u> だって、赤い靴買った <u>だろ</u> ？。
3	母	一緒。
4	次男	おれは何を買おう。
5	次男	ブラック買おう。
6	母	何でもいいよ、もう。
7	母	自分が好きな★*買いなさい。
8	次男	→ブルーを←*買おう。

*発話の途中で次の話者の発話が始まった場合、次の話者の発話が始まった時点に「★」で示し、重なり部分の開始を「→」、終わりを「←」で示す。

談話例3の発話文2で、母親は「だろ？」という疑問表現とともに「おまえ」を使用している。

こうしてみると、「おまえ」という対称詞は、命令形や疑問表現「だろ？」という、いわゆる男性語と言われる文末表現に呼応する形式として用いられている。これらの表現は、遠慮や配慮などが必要のない関係性で用いられる直接的な表現である。

母親と子どもたちとの関係性で考えると、このように上下関係が明確で、親しい関係性であれば、こうした直接的な表現を使用することは、方言主流社会だけでなく標準語圏においても不思議ではない。しかし、母親による「おまえ」使用は、必ずしも命令形や疑問表現とともに用いられているわけではない。「片付けて一、おまえのアイロンがけするんだから」(A家の母親から長男への発話)や「おまえなんか辛いつて食べんさ、これ[テレビに出ているやきそばのこと]」(A家の母親から次男への発話)という男性語を伴わな

い発話の中でも使われている。さらに、上掲した談話例1～3のいずれの談話を見ても、母親による「おまえ」使用の発話直後の子どもたちの発話には、「おまえ」使用が特別であるという反応はなく、日常的に子どもたちを指す対称詞として使われている語形であることが分かる。

もともと琉球方言の二人称代名詞には、同等以下をさす「ッヤー」（君、おまえ）と親しい目上をさす「ナー」（あなた）、疎の目上をさす「ウンジュ」（あなた）があるが、琉球方言では、こうした二人称だけでなく一人称をさす代名詞は現代中央語（共通語）に比べて少ない（内間2011）。その理由を内間（2011）は、中央語では話し手が他者との位置関係（上下関係・親疎関係）を重視している一方で、琉球方言では上下関係よりも親疎関係を重視し、話し手にとって他者は単純にウチの存在かソトの存在かを位置づければ十分であることによると分析している。しかし、母親にとって子どもはウチの存在であるにも関わらず、今回の調査データでは、母親による方言形の「ッヤー」の使用は観察されなかった。その理由は、若い女性による東北方言の使いづらさを考察している熊谷（2010）が言うように、性差のある標準語が方言主流社会にも普及し、もともとは性差のなかった方言に「女らしくない」というイメージが付与されたことによるだろう。沖縄県のテレビ番組における女性登場人物の発話を調査した高橋（2011：68）でも、「方言形式の指標性は男性的指標形式と同様の機能を持ち、特に一般女性登場人物の方言形使用は、正常ではない異端性を示」していた。つまり、方言主流社会の女性にとって方言形の代名詞は、男性語という認識をされているのである。

では、方言形「ッヤー」が男性語であり、ローカルなジェンダー規範に違反することから使用できないとすれば、なぜ母親は標準語による女性語二人称代名詞「あなた」や「あんた」を使わず、男性語二人称代名詞「おまえ」を使うのか。現代沖縄社会における母親にとって、標準語による女性語二人称代名詞は、目上あるいはソトの存在に用いる語であり、目下でウチの存在である子どもに用いる語ではないからではないか。こうした二人称代名詞に見られるウチ・ソト意識は、琉球方言による語形は用いていないものの、標準語形においても、内間（2011）が言及する琉球方言のウチ・ソト意識が影

響を与えていると考えられる。

つまり、母親が子どもたちに使用する「おまえ」は、男性語対称詞「おまえ」と女性語対称詞「あなた」という標準語によるジェンダー規範に基づいているのではなく、男性語対称詞「ッヤー」（方言形対称詞）とウチに対する対称詞「おまえ」（標準語の男性語対称詞）、ソトに対する対称詞「あなた」（標準語の女性語対称詞）という、ジェンダー規範とウチ・ソト規範が入り混ざった、ローカルな規範に基づいていると言える。

3.2 行為要求表現「命令形」と「禁止形」

次に、母親による命令形と禁止形の使用について述べる。命令形と禁止形は、話者の行為要求を相手に押し付ける強い表現であるため、従来、男性語の特徴的な表現とされている。しかし、こうした主張の強い表現もA家とB家の母親の発話では珍しくはない。

命令形は、上掲した談話例1と2にも現れていたが、母親の命令形に対し、談話例1の三女は「やだ」（発話文4）と拒絶し、談話例2の次男は「おれ、忘れ物しない」（発話文5）と反論している。次の談話例4でも母親の命令「早く宿題やれよ」（発話文1）に対して、長男は「もうやった」（発話文2）と返答している。このように母親は強制力の強い命令形を用いているが、聞き手である子どもたちは、必ずしも命令には従っていない。

談話例4 A家の母による行為要求表現「命令形」

1	母	早く宿題やれよ。
2	長男	もうやった。
3	母	もうなあ？。

母親の発話には、命令形と同じく聞き手へある動作をしないように命令する禁止形の使用も観察される。

談話例5 B家の母による行為要求表現「禁止形」

1	三女	なんかこれ今にもくずれそうだね？。
2	母	フン？ [ウチナーヤマトグチのフィラー]、あっ、ほんとだ＝。
3	母	＝なんでこれななめになってるの？。
4	母	<少し間>はずれてる＝。
5	母	＝なおしてー [三女の名] [やさしい口調で]。
6	三女	えー。
7	母	<少し間>「えー」言うな、「えー」言うな。
8	三女	「えー」って言うな [小さい声で]。

談話例5では、母親が壁にかけてあるものが外れているので直すように三女に依頼するが、三女は「えー」と言って従わない。それに対して、母親は禁止形を使って、『えー』言うな、『えー』言うな（発話文7）と言うが、三女は母親の発話をくり返し、母親の禁止をまじめに受け取らない。

内間（2011）は前述した代名詞だけではなく、琉球方言の様々な表現に見られるウチ・ソト意識を考察しているが、命令形について、琉球方言では「おやすみなさい」や「いってらっしゃい」、「さようなら」などのあいさつことばが命令形⁽⁶⁾で表されていることから、「命令が普通心情的に分け隔てのない近い関係で用いられるところからすれば、ウチ・ソトの一体化を前提とした表現といえよう。あるいは逆に命令形を用いることによって、心理的な一体化を目指したものともいえよう」（p.117）と述べている。母親の発話に見られる命令形や禁止形の使用を見ると、命令形や禁止形と言う語形をとってはいるものの、その機能としては、内間が言うように、母子の心理的な一体感を示す例だと言えるのではないだろうか。

3.3 疑問表現文末詞「だろ？」

最後に、疑問表現文末詞「だろ？」であるが、中島（1997, 2011）では「だろ？」は男性的疑問表現とされており、職場における女性の発話には「だろ？」

という疑問の文末詞は現れなかったという。しかし、A家・B家による母親の発話には、同意要求表現としての「だろ？」が頻繁に現れている。

まず、前掲した談話例2と3の中に、A家の母による「だろ？」の使用が見られる。いずれも自身の発話内容の正統性を断定し、相手に同意を強く求めるために用いている。談話例2の発話文1では、長男がその日に忘れ物をしたことから、母親は「鍵を持って行けということをこれまで何度も言っている」と、強い断定的な「だろ？」を用いて長男に確認している。発話文1の後、長男からの反応がなかったからか、発話文2では、同じ発話内容を女性語とされる疑問表現文末詞「の？」を用いて表現している。ここで大変興味深いのは、発話文2では自称詞として「お母さん」を使用している点である。「お母さん」と自称することで、母親自らが、母親役割を意識し、それにより、女性的な疑問表現とされる「の？」を選択したのではないかと考えられる。つまり、談話例2では、母親が役割に応じて、発話文1の上下関係における上位者としての発話と、発話文2の女性性である母親としての発話を巧みに切り替えている様子を示している。

B家の母親にも「だろ？」の使用は頻繁に観察されている。談話例6は、母親自らがかけているめがねの感想を三女と話している場面である。発話文2と8で母親は「だろ？」を用いて、三女に意見の同意を強く求めている。

談話例6 B家の母による疑問表現文末詞「だろ？」

1	母	茶色いめがね？。
2	母	イケてるだろ？、このめがね。
3	三女	いやー、普通。
4	三女	ふ、ふ、普通。
5	母	ハッシ [ウチナーヤマトグチで「もう！」の意]。
6	母	<沈黙>上等 [ウチナーヤマトグチで「優れて良い」の意] 言ってってたよ、[長女の名]も、[次女の名]も。
7	三女	なんかさー、フン [ウチナーヤマトグチのフィラー]。
8	母	頭よく見えるだろ？。
9	三女	あー、違う。

この場合は、発話文6で長女も次女も自分に同意していることを述べていることから、上位者としての発話というよりも、むしろ家族という共同体の仲間としての発話ととれる。「だろ？」を用いて、仲間ならば同意して当然であるという発話意図を強調していると言える。

次の談話例7は、B家の母親と四女がじゃれあってふざけている場面である。母親は発話文2と4で「だろ？」を用いているが、この場合は「だろ？」を使った発話の後も四女がふざけ続けていることから、強い同意や疑問を示しているわけではない。むしろ、四女のふざけた発話に、「～じゃないだろ？」を続けて用いることで、ことば遊びを一緒に楽しんでいるように見える。まさに、3.2の「命令形」や「禁止形」の使用で見られた、母子の心理的な一体化を「だろ？」を用いることでも示していると言える。

談話例7 B家の母による疑問表現文末詞「だろ？」

1	四女	かあちゃん、ぶぶー。
2	母	ぶぶー、じゃない <u>だろ？</u> 。
3	四女	いれてーよ。
4	母	いれ、「いれてー」じゃない <u>だろ？</u> 。
5	四女	ちょーんまげ。

さらに、談話例6や7における母親の「だろ？」使用を見ると、前述した「おまえ」使用と同様に、ウチ意識のマーカースとして機能していると言える。標準語による疑問表現には、女性語疑問表現「わよね？」や中立語疑問表現「でしょ（う）？」などがあるが、女性語疑問表現ではソトの存在に対する発話となり、中立語疑問表現でも、ウチの存在に対するの仲間意識や母子一体化を示すことができないゆえ、上記の談話例では、男性語疑問表現「だろ？」が最も適切な表現ということになったのであろう。

4. おわりに

以上、沖縄県内における家庭内談話から母親の発話に見られる男性語使用の発話意図を考察した。上掲した談話例に現れた母親の発話は、「母親」と明記していなければ、父親と見間違うものばかりであった。結果として、メディアに現れる母親は女性語を主に使っているが、沖縄県内の家庭内談話における母親は、様々な男性語を用いていることが分かった。むしろ、標準語による男性語を用いなければ、子どもとのウチ関係を示すことができないことが明らかとなった。

もともと琉球方言では男女差が顕著ではない（名嘉真1991）とされているが、現代の沖縄社会では、琉球方言語形はローカルなジェンダー規範に照らし合わせると男性語に当たるため、女性には使用が躊躇われている。そこで、標準語による男性語あるいは女性語を選択することになるが、標準語による女性語を用いると、相手をソトの存在と指標してしまうため、自分の子どもに対して親しさや仲間意識を表すには使えない。そこで、標準語による男性語を用いて、相手がウチの存在であることを示すのである。つまり、このような標準語による男性語を用いることで、母子の心理的な一体化を表している。

事実、調査対象とした家庭内談話における母親の発話には、今回抽出した男性語「おまえ」と「命令形」、「禁止形」、疑問表現「だろ?」以外にも、文末詞「ぜ」、「な」、「だよな」、「だ」、「か?」などの男性語も観察され、逆に、女性語と言われる「かしら」、「わ」、「わよ」、「わね」、「だわ」、「のよ」、感嘆詞「あら」、「まあ」の使用は全く見られなかった。本稿では女性語や方言形使用との比較や数量的な考察までは及ばなかったが、今後、稿を改めて論じたい。

最後に、今後、標準語によるジェンダー・イデオロギーが沖縄社会に浸透していくと、女性たちはウチの存在に対してどのようなことばを選択すればよいのだろうか。本稿「はじめに」で引用した、東北の若い女性が自称詞「おれ」を使用しづらくなったように、方言主流社会の女性たちのことばが奪われて行くことを危惧してやまない。これからも方言主流社会における女性た

ちのことばに注視していきたい。

注

- (1)最近の子どもたちによるごっこ遊びでは、必ずしも「お母さん役」がいるわけではないという報告もある。例えば、琉球新報の新聞のコラムによると、最近のごっこ遊びでは、家事や仕事に忙しくあれこれ世話を焼く「お母さん役」より、家族全員に無条件でかわいがられる「ペット役」の方が人気だという（「コラム『南風』琉球新報 2013年9月2日」参照）。
- (2)高橋（2009）の沖縄県内の中学生と高校生を対象としたアンケート調査紙による量的調査では、女生徒による「あたし」の使用率は大変低く、自分の名前の自称が最も一般的であったことから、自称詞「あたし」は沖縄県内の女生徒にとっては、別の方言語彙（標準語も含む）であって、自分たちの地域語の語彙範疇にはないのではないかと分析している。本稿の考察を踏まえると、沖縄の女生徒が「あたし」を使用しないのは、ソトの存在に対しての語形になるため、親しい友人や家族に対しては使用できないゆえであると考えられる。
- (3)残りの1割を占める「ごっこ遊び以外の場面」とは、クラスメートとの日常会話場面であり、クラスメートに対して、「来るの？」や「一番に書くのよ」といった質問や指示をするときに、女性語文末詞「の」や「のよ」が用いられている例が大半であった。文末詞以外では、自称詞「わたし」の使用例が1例観察されていた。
- (4)標準語では男性語であるが、地域語としては男女差がない語形や表現について、本稿では母親役割の女性が用いる場合のみを検討するが、地域語として男女差がないかどうかを判定するには、男性による使用例も検討する必要がある。この点は今後の課題としたい。
- (5)本調査のデータは、著者が仲宗根晴香さん（2012年度琉球大学教育学部生涯教育課程子ども地域教育コース卒業生）とともに収集したデータである。また、データの文字化については、研究補助員の玉城あゆみさんと平仲愛里さんにご協力いただいた。録音データをご提供くださったA家とB家の皆様とデータの収集と作成にご協力くださった方々にこの場を借りて御礼申し上げる。
- (6)あいさつことばは、標準語においても「おやすみなさい」や「いってらっしゃい」のよ

うに敬語形ではあるが命令形で表す。さらに、これらの表現は、目上・目下を問わず用いられる。しかし、内間（2011）によると、琉球方言は標準語とは異なり、絶対敬語であるので、目下に対して「おやすみなさい」は「ハタンケー（傾け）」、目上には「ハタンキンソーレー（横になってください）」を用い、目下には敬語命令形を使わない。このことについて内間は、沖縄ではあいさつことばが形式化・固定化されていないということを示していると述べている。

付記

本稿は平成25年度科学研究費補助金基盤研究（C）「現代沖縄社会における自然談話の分析研究」（研究代表者 高橋美奈子、課題番号 25370435）の助成を受けて行ったものの一部である。

参考文献

- 内間直仁（2011）『琉球方言とウチ・ソト意識』研究社
- 岡本成子（2010）「7 若い女性の『男ことば』一言葉づかいとアイデンティティ」中村桃子編『ジェンダーで学ぶ言語学』pp.129-144 世界思想社
- 金水敏（2003）『ヴァーチャル日本語 役割語の謎』岩波書店
- 熊谷滋子（2010）「3 方言の歴史－若い女性が東北方言を使いにくいわけ」中村桃子編『ジェンダーで学ぶ言語学』pp.50-63 世界思想社
- 小林美恵子（2009）「授業談話データベースによる実態調査－文末形式の『中性化』の様相－」『ことば』30 pp.64-81 現代日本語研究会
- 佐竹久仁子（2003）「テレビアニメの流布する『女ことば／男ことば』規範」『ことば』24 pp.43-59 現代日本語研究会
- 城間りみ（2013）『幼児による女ことばに関する一考察』2012年度琉球大学教育学部生涯教育課程子ども地域教育コース卒業論文
- 鈴木陸（1993）「女性語の本質－丁寧さ、発話行為の視点から－」『日本語学5月臨時増刊号』12-6 pp.148-155 明治書院
- 高崎みどり（1997）「第10章 女性の働き方とことばの多様性」現代日本語研究会編『女性のことば（職場編）』pp.213-239 ひつじ書房

- 高崎みどり (2002) 『女ことば』を創りかえる女性の多様な言語行動『月刊言語』31-2
pp. 40-47 大修館書店
- 高橋美奈子 (2009) 「地域語からみた自称詞における性差再考」『ことば』30 pp. 82-95 現
代日本語研究会
- 高橋美奈子 (2011) 「ローカルヒーロー作品における女性登場人物の話しことば」『ことば』
32 pp. 55-71 現代日本語研究会
- 堤 (石渡) さくら (2011) 「子ども番組研究～テレビアニメから見る母親の存在～」『日本
大学芸術学部紀要』53 pp. 57-65 日本大学芸術学部
- 中島悦子 (1997) 「第3章 疑問表現の様相」現代日本語研究会編『女性のことば・職場編』
pp. 59-82 ひつじ書房
- 中島悦子 (2011) 『自然談話の文法－疑問表現・応答詞・あいづち・フィラー・無助詞－』
おうふう
- 名嘉真三成 (1991) 「方言にあらわれた男女差－琉球方言」『国文学 解釈と鑑賞』56-7
pp. 90-96 至文堂
- 中村桃子 (2002) 「『言語とジェンダー研究』の理論」『月刊言語』31-2 pp. 24-31 大修館
書店
- 益岡隆志・田窪行則 (1992) 『基礎日本語文法－改訂版－』くろしお出版

(たかはし みなこ・琉球大学)